

茶の湯文化学会会報 No.43

第43号 / 2004年11月15日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「夏雲多奇峰」

信 廣 友 江

陸羽は捨て子であったのを拾われて、竟陵(湖北)の禅院で下働きをしながら育った。「陸羽自伝」には、生まれながら弁舌の才能があり、九歳のときから文章を作ることを学んだとある。陸羽は僧たちの廁を清め、土塀を塗り、屋根を葺き、雑草を刈り、そして三十頭の牛の世話をした。日々仕事は山積したが、合間にも文字を覚えることに夢中になった。

住んでいた竟陵の西湖には紙がなかった。だから陸羽は紙の代わりに、面倒を見ている牛の背中に文字を書いて練習した。いままも愛猫家や愛犬家などは、つれづれにその背の毛並みに逆らって指で「一」字や「〇」の記号を書いたりする。撫でればつややかな毛の面にもどり、再びいたずらの対象となる。牛の背は広く、その毛は硬く短めであろうから、文字を書けば毛は逆立ってその形を残し、恰好の石盤(あるいは水書板)代わりとなったことだろう。

文字の練習はすなわち書の練習でもあった。毛筆筆記具は読み書きという実用の要求を満たすのみならず、美的表現をも可能にさせる。中国では古来多くの名書が残されてきた。陸羽も牛の背に文字を大書しながら、同時に書への関心を高めていったに違いない。

陸羽が生きた時代は唐の半ばにあたる。玄宗が楊貴妃にうつつを抜かし、政治は乱れて社会は変動期にあった。その変動は書の世界にも訪れていた。それまで温雅で気品ある王羲之系の書が主流であったのに対し、大胆かつ躍動感あふれる書表現が行われはじめたのである。忠臣烈士として知られる顔真卿の激情たぎる行草書、大酔しては一気呵成、縦横無尽に草書をあはれ書きする僧懷素の狂草が人目を引いていた。

陸羽は禅院を出走し、南へ流れていつしか湖州に住みついた。顔真卿も左遷され、地方官として湖州にやってきた。懷素も湖州にいたらしい。書をめぐる三人の交流がここに始まる。

陸羽は「唐僧懷素伝」を書きとめた。懷素は幼いころ家が貧しく、紙がなかったので庭の芭蕉の葉に文字を書いて練習し、不足すれば漆器の盤や板を使い、あまりに書きすぎてみなすり減ったとこれにいう。顔真卿は泥を塗った壁で練習したとの話も聞くから、三人とも似たような苦勞をして育ったことになる。

顔真卿と懷素の問答を陸羽は次のように記録する。
〈顔真卿〉夫草書於師授之外、須得之……

草書は師から教えられるほかに、自ら悟らなければ

ばなりません：

〔懷素〕貧道觀夏雲多奇峰、夏雲因風變化、乃無情勢、又遇壁拆之路、一一自然、

わたしは夏の雲に奇峰の多いのを見て手本にしています。夏の雲は風によって変化して、一定の決まった勢いがありません。壁の裂け目の鋭さにも感銘を受けました。どれも道理にならなくて一つひとつ自然です。

夏の雲とは入道雲のこと。むくむくと立ち上るかと思えば横へと広がり、またたく間に姿を変える。秋のひつじ雲が醸し出す涼やかさは異なる奇想天外の動きがある。また、壁を走る深い亀裂は細く鋭く、その線には胸突く強さが存在する。

たしかに懷素の草書作は、文字が大きくあるいは小さく、連綿と続いて右に左に自由に動き、筆線は細身で紙背を貫くような強靱さがある。まさに夏雲の奇峰と壁拆の路を思わせる。

陸羽はまた、顔真卿の悟入は屋漏痕（屋根裏にしみた雨漏りの痕）にあることを記す。いずれも「自然」に師を得たものである。さて、牛の背で書を学んだ陸羽は何を書法悟入の材としただろう。湖洲の豊かな自然の中に茶の道にも通ずる妙理を見出して、さまざま

に楽しむその姿が髣髴される。

（安田女子大学助教）



本年度第二回目の理事会を、九月四日（火）二時から池坊短期大学で開催した。出席理事は二三名であった。会長挨拶の後、議事に入った。

○報告事項

創立十周年記念総会・大会について谷理事より、記念茶会について戸田副会長より、二〇回研究会について高橋副会長より報告があった。

近畿例会については、今年度中に研究発表や見学会等二〜三回の開催をめざして計画中である旨日向理事より報告があった。また、東京・高知・東海の各例会も当初の計画通り実施・進行中であることが報告された。

会誌について小泊副会長より、刊行の遅れている第九号の状況について説明があり（発行ズミ）、第一〇号は年内に発行できる見込みであることが報告された。また会誌の発行が遅延している状況を改善するための具体的

方策を、編集委員会において立てることになった。

会報は、四三号・四四号については計画通り発行予定であることが、欠席の影山理事に代わり倉澤会長から報告された。

二〇〇四年国際お茶学術会議について小泊副会長より説明があり、多くの参加を呼びかけるために当学会も協力していくことが確認された。

○審議事項

第二一回研究会においては創立一〇周年記念講演会の第一部とし、「世界のお茶・日本のお茶」というテーマで開催予定であることが小泊副会長より説明された。会場などは未定であるが、一月七日開催で発表者等はすでに決まっているので、早急に会場を手配して案内状を発送できるようにすることで了承された。

記念講演会の第二部は「これからの茶と茶の学問」というテーマで、学会創立当初に尽力していただいた方々に講演をお願いする方針で計画中であり、来年の二月一二日をめぐりに京都で開催する予定で、これから会場・講演者などを決めていくという案が倉澤会長から説明された。

発表者・会誌会報原稿募集

大会・研究会・例会の発表者および会誌・会報の原稿を募集しています。

大会（来春開催予定）については、報告二〇分、質疑応答一〇分、研究会・例会の報告は六〇分程度です。発表を希望される方は、事務局までご連絡ください。なお、東京例会については中村修也世話人（kasahiro@edion.ne.jp）にご連絡いただいても結構です。

会誌の原稿は、投稿規定を御覧の上ご投稿ください。会報の原稿は形式などにこだわらず投稿していただいてもかまいませんが、手直しなどをお願いすることがあります。



東京例会

（二〇〇三年七月二六日）

『利休百会記』の文献学的研究の射程

矢野 環

『利休百会記』は利休関係資料としてよく知られており取り上げられることも多いが、

利休晩年の実際の茶会の控えに基づくものであるのか、利休風茶会の模範として作成されたかという議論はまだまだ続いている。ある会の日時にふさわしい歴史的背景があるとしても、そのことはある会の存在の信憑性を高めるも、百会全ての信憑性を保証することにはならない。

『利休百会記』には、多くの写本があり整理分類もされていない。天正十五年型と天正十八年型といったような分類らしきものが提唱されたことがあるが、本文に依拠した系統分けとは言い難い。まずは文献学的な検討を加え本文を確定し内容の検討を行うべきである。今回四〇ほどの写本を検討し分類結果を得たので報告する。

写本はかなり早い時期に分岐したと思われる二つの系統に纏められ、二つの系統をさらに六類と四類に分けることが出来る。原型に近いと思われる麗澤本・東大本・伝宗和本（矢野氏分類では第一系統第一類）などを標準的なものとすべきである。数回分の欠落がある系統（矢野氏分類では第二系統）の写本にはかなりの加筆がある。古写本として逢源齋が一六五三（承応二）年に書写したと思われる逢源左本と伝宗和本

がある。

伝利休自筆紀州徳川家旧蔵断簡には本文に崩れがあり、良本とはいえない。

『利休茶湯書』第六「百数寄」（矢野氏分類では第一系統第五類）は、熊倉功夫氏によれば『南方録』「一会」の編集に使われた原本であるが、「会」の原型は立花実山以前かなり早くに、刊本「百数寄」ではない同系統の写本によって編集された可能性が高い。

『南方録』「覚書」の編集に使われた重要な書物（寛永七、八年の成立）が見いだされた。紹陽の師「宗陳」なる人物は実態が無く、「宗珠」の誤写が一人歩きしたに過ぎない。

（二〇〇三年一〇月二五日）

望月間道：現存例と名称

佐藤留美

名物裂は、鎌倉時代・室町時代を中心に、江戸時代初期までに舶載された「金欄」「緞子」「間道」などの高級織物の内、茶湯の発達とともに、主に茶人達によって名物茶入の仕覆や表装裂などに用いるために見いだされ、後に名称を付けて賞翫されたものである。

名物裂のうち「間道」は、一つの名称に対して数種類の異なる文様が存在する例や、同

じ裂に対して複数の名称がついている場合があり、名称や文様を分類・理解することが困難な織物の一つである。その複雑な名称や文様が生じた要因について、望月間道を取り上げ考えてみた。

「望月間道」と、異名称を持つがそれと同タイプの裂十一種を裂片や仕覆に使用された裂地の格子模様の部分や縞色などの共通する文様を組み合わせ、この織物の全体像を検討してみた。その結果、本来の「望月間道」を持つ複雑な文様構成が浮かび上がった。残存する部分からの推定だが、この織物の地は赤茶地であり、端には白と紺の筋が続き、筋の横には赤茶・白・紺で構成した格子の部分、または同色の組み合わせで、縞と真田を取り合わせた部分などが段ごとに繰り返されている。従って、裂地のどの部分を選び取るかによつて、文様は全く違う表情を見せる。これが一つの名称に対して数種類の文様が存在する要因となっているのではないか。

織物の文様変化を生かして楽しむことが出来る裂地、それが「間道」の魅力かもしれない。

桃山時代には、豊臣秀次による手鑑のための「桂本万葉集」の切断があり、江戸時代前期には木版刷りの「御手鑑」（俗に「慶安手鑑」とも呼ぶ）の作成もあり、古筆を含め古い筆跡を集めることが流行ったことが分かる。

また、この時期の茶会には藤原定家や定家に近い歌人などの古筆がかなりの回数使われている。茶の湯の世界では、連歌などを通して定家の和歌論などが茶の精神と結びつき、定家や定家に近い人の筆跡が尊重され茶席に登場し、江戸初期までの主流になった。今日我々がイメージする古筆にあたるものは、もう少し遅れて登場した。「慶安手鑑」などが刊行される以前に、今日の古筆の主役である紀貫之や源俊賴とされる仮名を切断までして茶掛けにしたという事実はあやふやになる。手鑑などの製作過程で切断された巻物や冊子本の断簡が、時たま掛け物にされたり手鑑から剥がされたりして茶掛けに利用されたと考えた方が自然ではないか。

江戸時代の後半もほぼ同じような状況であったのだろう。明治時代に入り近代の好事家が仮名筆跡の冊子や巻物にも興味を持ち始め、一人で所有するに足らぬ高価すぎる場合など、仲間に分けるといったことがなされるように

茶の湯の構図

福良弘一郎

久保利世が書いた『長閑堂記』、鳳林承章が書いた『隔賞記』、川上不自の『不自筆記』、それに稲垣休叟の『松風雑話』を取り上げ、茶会の流れがどのような構図になっているかを考察しようと考えた。

江戸時代初期の寛永期には桃山時代のようなおらかな茶会が開かれていたことがいくつかの茶会記から伺える。『隔賞記』は、殿上人の社会の記録であり、茶会には様々なスタイルがあつたことを示しており貴重である。大名の世界でも同じようなスタイルの茶会も開かれていたと想像することができる。

不白の時代になると、茶の湯の乱れに対処するために自己修煉の面を強調するようになり、人を見つめる哲学的な茶の湯の形態が重要視されるようになる。

これを庭、軒、茶室といったことを対象にして考えてみると、庭には宇宙的に人を癒す快適空間が設定され、躊躇、矚口といった軒の空間には、作爲的に人を強制し、動作化させる空間が設けられている。そこを超えると茶室には飲食を伴う世俗的な場が設けられている。この世俗的な空間は、気楽な社交的要素

なつたのではないか。有名な「継色紙」「伊予切」「石山切」「戊辰切」「昭和切」などは皆、近代に入って切断されたものである。もちろん「高野切」「本阿弥切」「寸松庵色紙」の名称は江戸時代からあるが、これらとても江戸時代に茶掛けのために切つたのかどうかは分からない。



千利休が生けた「抛入花」について

米村孝月

『齡花集覽』にて今に伝えられた「古哲の生花」は、本来は池坊家に代々伝えられているべき、花の道の奥義であつた。だが、池坊家が代々住していた六角堂は、度々火災に見舞われていた。そのために、貴重な資料は消

失し、伝授された写本のみが現存していると思われる。『齡花集覽』が伝えている「古哲の生花」には、侘び茶の湯を大成した千利休が定めた「生花四箇条傳」が追加され、合わせて伝えられていた。その秘伝書は、「古哲の生花」として、明王院に伝えられたことを、「古哲の生花」の奥書が物語っていた。

素を持つているが、油断すると人間の品格が問われることになる。茶室の緊張感と集中力は、人としての修養の場に変化していることを示している。茶事の中の、寄付・露地・懐石・中立までの人間関係と、それ以後の炭点前から、濃茶・薄茶・送り礼までの人間関係には、異なる意味があるという茶の湯の論理が存在することを茶事の構図の中に見て取ることができる。

(二月二十八日)

古筆切断と茶掛け

名児耶 明

近年の茶室では、平安時代から鎌倉時代初期にかけての古筆と呼ぶ仮名筆跡に人気がある。この古筆は、桃山時代以降茶掛けのために次々と切断されたような印象があるが、有名な古筆が茶掛けのために切断されたという文献は見あたらない。古筆が切断された例はあるが、手鑑の作成などのためであつたらしい。

書の鑑賞は、すでに奈良時代に始まつており、平安時代から鎌倉時代にかけても、より美しくより分かりやすく字を書こうとして、書を鑑賞し学んできた。

千利休は、能阿彌が大成した茶礼の奥義を荒木(北向)道陳から授かった。また武野紹鷗からは、村田珠光が伝えた茶の湯の奥義を授かった。その両者を融合し、侘び茶の湯を大成したことは広く知られている。だが、茶室の床の間に飾る生け花、つまり「茶花」の奥義を、誰から授けられたかを知る人はそう多くはいない。そのために、「茶花とは、野にある草花をそのままに、一輪生けさえすればよい」と思われている方がずいぶんおられるように思う。だが『齡花集覽』や『遠州流・生花禁忌差合誌』等に描かれていた、利休作と伝えられている茶室に生けられた生け花は、水際が一本に見えるように束ねて生けられていた。それらの作品を通して利休がかりかけてくるものとは、どのような事柄であろうか。

『齡花集覽』が伝える「古哲生花四箇条傳」の奥書には、

右四力条門人千宗易生花伝授之旨
当要因相残候傳授如件 専好

とあつて、利休が初代池坊専好の門人であつ

たこと、しかも利休には、池坊家に伝えられていた先哲達が伝え残した花の道の奥義の全てが授けられていたことがわかる。

『齡花集覽』が伝えている、「古哲の生花」とは、池坊の当主にのみ代々伝えられてきた花の道の奥義であった。その奥義には、初代専好によって、更に四力条が追加されていた。追加されたのは、ほかならぬ利休が定めた『四箇条傳』であった。

初代専好に伝えられた池坊の古傳である「古哲の生花」は、明王院のたつての願いにより、慶長一二年六月、彼に伝えられた。幸いなことに、その写しが『齡花集覽』として今に伝えられている。

『齡花集覽』が伝えている花の道の奥義の数々は、恐らく初代専好自ら伝えたものだろう。同書が伝えている『抛入花傳書』は、貞享元年に出版された花の道の奥義を記した花書として広く知られている。だがこれまでは、誰が記した書物かわからなかった。同書の出現により、初代専好の伝えだつたことが明白となった。

「古哲の生花」とは、池坊家に代々伝えられてきた花の道の奥義であった。初代専好に師事した利休は、「古哲の生花」を授けられ、

ついに専好と肩を並べるに至つた。だが利休は、花の道を初代専好にまかせて、侘び茶の湯を大成することに力を注いだ。

利休が初代専好から花の道の奥義を授けられていたことの証としては、文化六年に刊行された『小笠原諸礼大全』の中の『茶道百首教歌』の跋文がある。

天正八年孟春 抛筌齋専利休 花押

同書の自筆署名には、抛筌齋「専」利休と、

天正八年孟春

花筌齋専利休



「専」の一字を戴いていた。『国史大事典』等は、利休の雅号を「抛筌齋、利休」としているが、同書では初代専好から「専」の文字を戴いていたことが分かる。さて、利休が生けたとされる「茶席の花」

は、立花の形式によく似ているといわれる。

ここに載せる一輪の「茶花」も、その足下が水際にて一本に纏めて生けられていた。つまり利休が生けた抛入花は、立花の形式に添って生けられていたことを窺い知ることが出来る。更に注意して観れば、牡丹の花は葉に挟み込まれて生けられていた。つまりこの姿は、『池坊専応口伝書』の序文に語られていた、花の道の奥義である「生け花を生けるに当たっては、花、葉、ともに飾る」の秘文を守り、生けられていたのだ。このことをもってしても、利休が初代専好から花の道の奥義を授けられていたことを知ることができる。しかもこの生け花の作品には、「守ル花、愛敬、大事也」の書き入れがなされていた。言葉を変えて言えば、花の道が主題としてきた「万代不易の法則」の中の一つとして伝えてきた、「愛敬(あいぎょう)」に添って生けられていたのだ。

随分と前になるが、日大教授であつた故湯川制氏は、池坊の機関誌である「華道」の昭和五一年一二月から翌年の七月まで、八回に分けて『池坊傳書研究の手引』と題する論文を寄せられていた。そこには氏が精査された

池坊家所蔵の初代専好傳書を含む一〇巻が列

挙されていた。しかし、『齡花集覽』が伝える「古哲の生花」は、その中に含まれていなかった。ということから推し量ると、『齡花集覽』が伝える初代専好傳書である「古哲の生花」は、今では同書のみが伝えている池坊の古傳であるといえる。

このように見てくると、「茶花」は、花の道が伝えている奥義に添って生けるのが本儀ではなかるうか。つまり「茶花とは、花の姿を借りて、人の道を論ず」、いわゆる「人の手本となるような姿に生ける」ことが、本来の姿なのではあるまいか。



東京例会

次の通り開催します。一月の例会は、東京芸術大学で開催します。二月の例会は五島美術館で開催する予定です。二月の例会については、次号の会報でもお知らせすることが出来ると思います。

〇一月二十七日(土) 午後二時から

「茶会記における史料の考察」 鷲見綾子氏
「本草書に見えるお茶(二)」 岩間真知子氏

〇二月二十六日(土) 午後二時から

「伝徽宗皇帝筆『鴨図』のカモについて」 下坂玉起氏
「未定」 生活と芸術の会

近畿例会

次の日程で開催します。会場は池坊短期大学です。

〇二月一日(土) 午後二時から

「直弼の師匠」 頼 あき氏
「茶室と感性科学」 野口企由氏

東海例会

本年度開催予定の例会については、すでに前号でお知らせしていますが、未定であった発表題が決まりましたので再度お知らせします。会場は名古屋文化短期大学です。

〇一月二十六日(土) 午後六時から

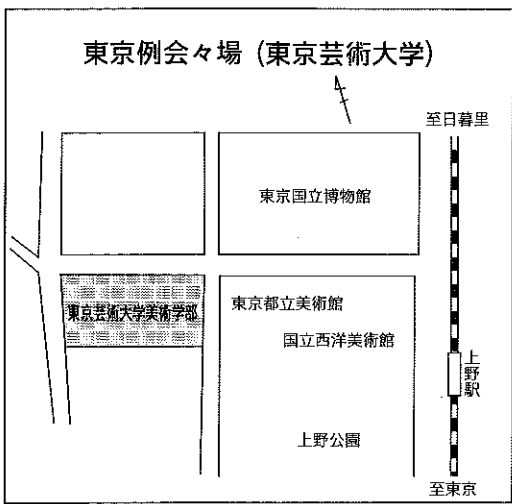
「尾張徳川家の御庭と御庭焼について」 佐藤豊三氏
「茶会記で見る信長と秀吉」 田中秀隆氏
〇二月二十五日(土) 午後六時から
「尾張藩の茶の湯」 戸田勝久氏

高知例会

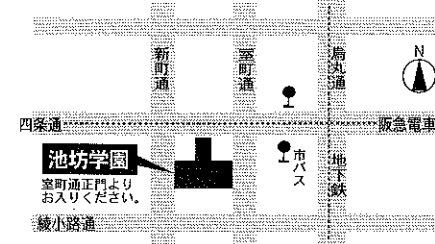
前号でお知らせした一二月の例会については、詳細が決まりましたので、再度お知らせします。場所は高知県立文学館慶雲庵茶室です。

〇二月二日(日)

シンポジウム「茶会の歴史とこれから」 一〇時～一二時
茶事(松花堂弁当による) 一二時～一六時
会費は五〇〇円です。参加希望の方は柏井武さん(電話ファックス 〇八八・八九三・二一六六)までご連絡ください。



近畿例会々場（池坊短期大学）

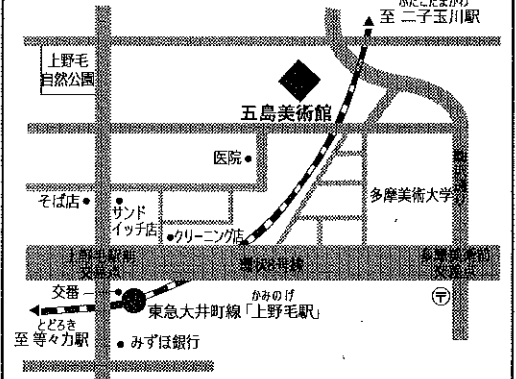


最寄り駅 地下鉄/四條駅/ 阪急/烏丸駅(地上出口26番)
市バス/烏丸四條

池坊短期大学・池坊文化学院

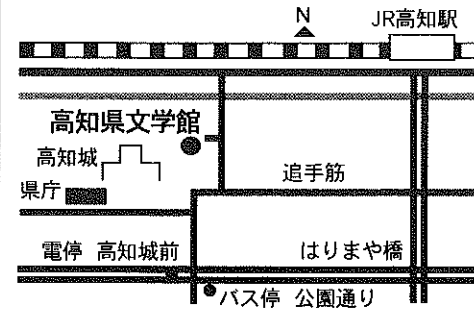
〒660-8491 京都市下京区四條室町鶴鉾町 ☎0120-87-3852

東京例会々場（五島美術館）

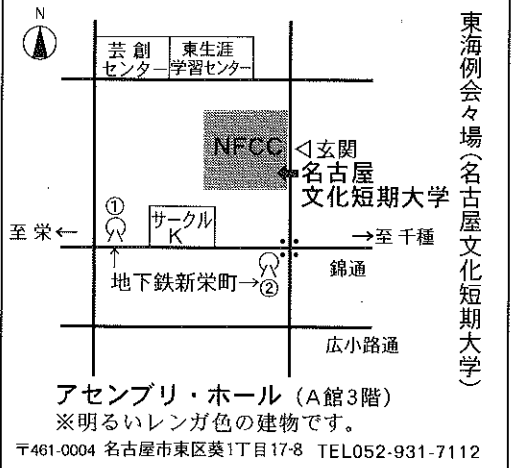


〒158-8510 東京都世田谷区上野毛3-9-25
ハローダイヤル 03-5777-8600 / テープ案内 03-3703-0661

高知例会々場（高知県文学館）



高知県丸ノ内1-1-20



アセンブリ・ホール（A館3階）
※明るいレンガ色の建物です。

〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目17-8 TEL052-931-7112

後記

*今年の夏・秋には多くの台風が襲来し、大地震も発生しましたが、被害を受けられた会員の方もおられると思います。お見舞い申し上げます。

*今号は、掲載の終わっていなかった東京例会の発表要旨を中心に編集しました。一年以上も前の例会の報告で、発表をされた方々にはいままらとおしかりを受けるかも知れませんが、要旨を送っていただいていたので掲載しました。

*本学会が発足して一〇年ということで、記念行事を行っています。春に開催した記念茶会についてはすでに報告しましたが、理事會報告にふれている第一回目の記念講演會を先日終えました。参加者は必ずしも多くはなかったのですが、世界のお茶の現状について興味深い講演がなされました。要旨は、次号か次次号に掲載する予定です。また、第二回目の記念講演會を来年二月に開催するべく準備を進めています。ふるってご参加ください。